

人間にとって宗教とは — 北東アフリカからの問いかけ

第2部 エチオピアの宗教：絶え間なき再生

変化する環境への適応としての キリスト教受容

佐藤 廉也

□はじめに

私がこの14、5年調査を続けているエチオピア西南部の焼畑民マジヤンギルという人たちの間でも、この20数年間の間にキリスト教の受容、キリスト教への改宗が急速に進んでいます。それについて私がフィールドで見たり、聞いたりして考えたことを中心にお話したいと思います。

ジャック・スタウダーという人類学者が1960年代、66年ごろに撮影したマジヤンギルの写真があります。当時2年ほどマジヤンギルの村に住み込んで調査を行っていた時に撮影したもので、その中には、ローカルビールを飲んで宴会をやって、親指ピアノを皆で演奏している写真などがあります。このような風景は、当時は日常的なものだったと思うのですが、今では非常に珍しくなっていて、村の中に生活していても滅多にお目にかかれないものになりました。

先ほど栗本さんからディンカやアニュワのキリスト教の普及の話がありましたが、マジヤンギルについても、非常に急速な改宗と同時進行で急激な社会変化が起こりました。スーダンの事例とよく似た点もあると思いますし、違った点もあるかもしれませんが。そういうことも少し考えながら、お話をしたいと思います。

問題の所在ですが、キリスト教への改宗現象において、人はなぜ、どういう状況において改宗を選択をするのかということが、問題になるかなと考えています。私自身、調査をしながらずっと考えてきて、まだはっきりとした答えは出ていませんが、それについて考えたいということです。そ

れを理解するために、例えばキリスト教という宗教の教義そのものについて考えるという方法もあるかもしれませんが、私はそれよりもむしろ改宗現象が進行する背景となる社会的な状況というのが大切なのではないかと考えています。

マジヤンギルの場合は、そのなかでもとりわけエチオピア国家とか他集団との関係が、キリスト教を選択して自分自身で普及させていくプロセスで大きな背景的な要因だったと考えております。

□キリスト教受容以前

キリスト教受容以前のマジヤンギルは、森の中で焼畑とか狩猟とか採集なんかをして暮らしていて、非常に小さな集落（例えばわずか2世帯とか3世帯から成るような）を開拓して焼畑を行い、ひっそりと暮らしていました。

同じ集落に10年も住んだら、何かのきっかけで別の土地へとパツといなくなってしまう。そういうことが頻繁にあったわけですが、その移動の大きな要因の一つに、頻繁に繰り返される他集団による暴力、具体的には近隣の集団——例えばサバンナには別の集団でアニュワという人たちがいます——が、サバンナの方からたびたび侵略にやってくるのが挙げられます。集落が襲われて侵略のルートが出来ると繰り返してやってきますから、その場に居られなくなって別のところに移ってしまうのです。

また、キリスト教受容以前には、伝統的な独自の信仰、タパ信仰がありました。マジヤンギルのなかでタパというのは儀礼を行うエキスパート、

宗教の専門家のような人で、彼らが神様や精霊たちとの交信を行い、病気の治療や占いなんかをしていました。

マジャンギルに最初にミッションが入って布教を始めたのは1965年のことだったんですが、それからしばらくして急速に改宗が進むことになりました。マジャンギルのキリスト教受容の特徴的なこととして、特定世代、具体的には1960年代生まれ世代以降の人は、ほぼ100%がキリスト教徒であって、マジャンギルであること、マジャンギルとして生活することイコールキリスト教徒であるという意識を持っていることが挙げられます。

改宗のきっかけは1960年代からのミッションの活動ですが、不思議なことに70年代に入ってミッションが社会主義革命の影響で撤退して以降に、マジャンギルの人たちが村の中でリーダーシップをとって、独自の改宗運動を行って普及していったという経緯があります。

□キリスト教受容の始まり

キリスト教受容期に何が起こっていたかということ、もっとも大きい変化と思われるのは定住化です。移動生活を行っていたマジャンギルが急に数百人を超えるような大きな村を作ってそこに暮らすようになります。これはエチオピアの社会主義政権の政策によって始められたものです。社会主義国家が行政村を作りなさいとやってきて、マジャンギルの人たちはそれを積極的に受け入れて定住村をつくっていったという経緯があって、それまで無政府状態で暮らしていたマジャンギルの人たちが、国家行政の末端にある行政村の中で暮らすエチオピアの国民ということになりました。いいこととか困ったこととかさまざまありますが、この変化に伴って生じたと思いますが、一ついえるのは、かつてのような甚だしい暴力は多少緩和されたということです。

かつては他集団が侵略してくるだけではなく、マジャンギルの間でも、例えば宴会で酔っ払って、精神が高揚して人を殺すとかで、集団と集団の報復の連鎖が生じる危険性がありました。実際に具体的な歴史を聞いていくと、そういうことはかなり頻繁に起こっていて、そのために集落が放棄されてしまう大きな理由になっていたということが分かります。社会主義政権になって、そういった

ことが稀になったということがあります。そのようなことがあって、伝統的な信仰、タバによる信仰というものが否定されて、かつてタバ信仰が果たした幾つかの役割がキリスト教を選んだ人たちによって継承されるということになりました。

□西南部の集落の変化

エチオピア西南部を、ランドサットのナチュラルカラー画像からみてみますと、斜めに大地溝帯が走っていき、赤っぽく見えるのがサバンナの世界で、先ほどのアニューワとかヌエルの人たちが住んでいる世界。緑色に見えるところは、概ね森林なんですけど、その中でもサバンナに近い森林地帯、その辺にマジャンギルが住んでいる地域があります。

写真①は集住村で、朝、教科書を手に持って、小学校に通う子供たちが写されています。集住村の真ん中辺というのはこういう風に非常に綺麗に整地されて整った村となっています。

写真②は伝統的な集落です。

写真③は芋を植えているところで、生業の面で



写真① 集住村：小学校に通う子どもたち



写真② 典型的な伝統的集落



写真③ 芋を植えている様子

図1 1967年（集住化以前）

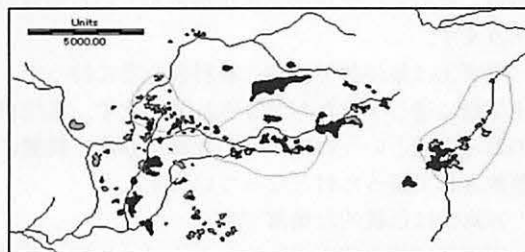


図2 1999年（集住化進行後）



は今でもスタウダーが調査していた頃と変わりません。

集住化が具体的にどういうものだったのかと言いますと、図1が1960年代、図2が1999年前後の集落の分布なんですが、図1を見ると小さい集落が非常に多く散らばっていることが分かるかと思えます。図の中央部にあるのが私が調査しているクミという村ですが、このように広い範囲で大きな村が出来ています。

かつては図1のようなところだったんですが、今では、図2のように、クミの周りにも集住村が幾つもあります。これは全部集住村、定住民たちが居る村です。

□マジャンギルの教会

写真④は、マジャンギルの村のキリスト教会です。2006年には新しい教会（右の建物）を建てていまして、その建物はタン屋根でかなり大きくて立派なものなんですが、左の建物は1990年代にずっと村の人たちが礼拝を行っていた草葺の教会です。

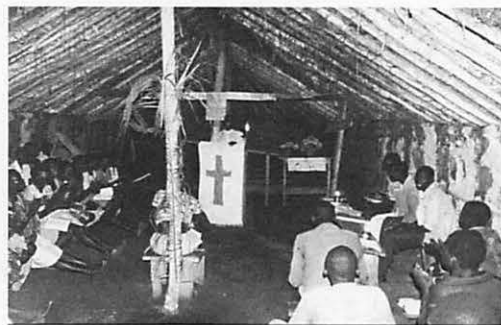
写真⑤は教会の内部です。私がキリスト教について集中的に調査していたのは1990年代半ばぐらいまでですが、その頃には週に4回、夜になると村の人たちが大勢集まってここで礼拝を行っていました。礼拝を行うのに太鼓を叩いて歌を歌ったり——この歌はマジャンギルの言葉で作られた賛美歌です——、それからアムハラ語の聖書を読んで、マジャンギルの言葉で解釈したりしていました。村には何人かの長老と呼ばれる教会のリーダーがいて、賛美歌や聖書のことなどいろいろなことを教えていました。

□マジャンギルのキリスト教受容の歴史

集住とキリスト教受容の時間的な経過をざっと



写真④ キリスト教会



写真⑤ マジャンギルのキリスト教会内部

みますと、1974年に社会主義革命があります。その10年ほど前、65年に長老教会系の福音主義のミッションが布教を開始します。具体的にはアメリカ人の牧師とその家族が森にやってきて、教会を建てるという出来事がありました。そして社会主義革命後に、ミッションが国外退去させられます。しかし不思議なことにマジャンギルの間でキリスト教への改宗運動が急激に進んだのが、そのミッションがいなくなった後なんです。改宗運動と平行して、1979年前後から、集住村、定住化が開始しました。

ここでマジャンギルの伝統的な信仰についてお話ししておきますと、ワコヨと呼ばれる—オロモ語のワカという神様の借用語だと思んですが—至高神的存在がいて、その他に精霊もいるとされています。

ちなみにキリスト教に改宗した後でも、神はワコヨという名前では呼ばれています。改宗した世代の人たちは、かつてタバが操っていたというか交信していたワコヨというのは、実はワコヨではなくてセيطان（悪魔）だったと言っています。

タバは、神とか精霊と交信をすると言われていますが、彼らの果たす役割で特に重要なのは、病気を治す力であったり、暴力を遠ざけて平和を維持する力だったりします。非常に力の強いタバの住んでいる所では、暴力はマジャンギル同士でも行われなし、他集団からの暴力にもさらされないと信じられていました。

初期のミッション活動ですが、前述したように、1965年に長老教会からアメリカ人の牧師、ハーヴェイ・ホエクストラ—マジャンの間ではオドラという通称名で知られています—が派遣されてきました。マジャンの中では今でももっとも有名な外国人です。彼は森のど真ん中のゴダレという地名の場所に飛行機の発着場を造りまして、ここで布教活動を開始しました。当時の非常に有名で力の強いといわれていたタバで、バルティという人がいましたが、彼はタバであるにもかかわらず、オドラには友好的に接して、非常に協力したと書かれています。

オドラは、小学校を造って子どもたちに教育を施したり、あるいは診療所を造って伝染病のワクチンをうったり、といった医療活動にも力を入れていたということです。

キリスト教の教義を伝えるために彼が使ったのはテープレコーダーです。これが絶大な効果を発揮したと、今でも人々の間で語られています。

○キリスト教を受容した世代

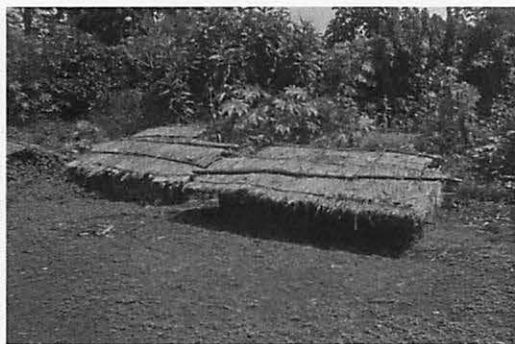
キリスト教を受け入れた世代の境目がどこかということですが、先に述べたように1960年生まれ以降はほぼ100%改宗しています。サンプルは30人くらいですが、40年代生まれで約17%、50年代生まれで67%で、50年代生まれあたりが境界になっているようです。65年の時点で考えますと、50年生まれの人には15歳くらいで少年期に当たります。それらの人たちがそれより先に生まれた人たちは、つまり65年にはすでに成人していた人たちは、ほとんどキリスト教を受け入れなかったと考えられます。

写真⑥のように、ローカルビールを飲んでパーティーをしている旧世代の人たちを一目見ると、キリスト教への改宗世代であるかそうでないのかは、大体分かります。改宗世代の人たちは、少し綺麗な洋服を着ています。

改宗世代の間でどのようにキリスト教が語られ、どのような生活スタイルがとられているのかということですが、もっとも特徴的なことは禁酒禁煙です。これはみんな厳格に行っていて、改宗世代の人たちにはビールでもほとんど飲む人はいないし、ローカルビールも蜂蜜酒も飲みません。そして、タバ信仰を強く否定します。タバの交信する精霊は実は悪魔であったということが典型的に語られるわけです。さらに、旧世代の習慣の多くを否定します。しばしば語られるのは、昔のマジャンギルは死ぬまで酒を飲んで酔っ払って、酒



写真⑥ ローカルビールを飲む老人たち

写真⑦⑧ 民族劇を演じる
マジャンギル

写真⑨ マジャンギルの墓

を飲んだ勢いで殺し合いをしている人たちだったが、今は違うということです。ちなみにこれはマジャンギルのキリスト教改宗世代の間だけではなく、町の他民族の人たちもしばしば同じようなことを語ります。オドラの自伝には、マジャンギルは一体どうしてしまったんだ、すっかり変わってしまった、と町に住んでいるエチオピアの商人たちがびっくりしている、というようなことが書かれています。昔は町に出てくると酒を飲んで酔っ払って喧嘩をした人たちだったのが、今は全く酒も飲まず、完全に変わってしまったとも語られています。

そして、改宗世代は集住村の中心部に居住することを好み、旧世代は縁辺部に住むといったように、村の中でも住み分けがある程度行われています。ここで重要なのは、集住化の受容とキリスト教への改宗は、不可分のものと改宗世代の間ではみなされていて、新しい生活スタイルをとることはキリスト教徒になることであり、キリスト教徒になるということはそういう生活を選ぶことなんだと、受け止められているわけです。

写真⑦と写真⑧は、1994年に行われた民族対抗のスポーツゲーム大会で、マジャンギルが民族劇の稽古をしているところです。かつてのマジャン

ギルという話で、若者が他の集落に女の子を捜しに行くという、嫁さん探しの難しさをテーマにしたものなのですが、そのなかで、よたよたと歩いてその辺に立小便するのがマジャンギルであるといったように、昔のマジャンギルが非常に戯画的に描かれています。昔の人たちというのは、親しみを込めて語られるという側面もあるんですが、こういう芝居を見ていると、われわれは、このような昔の生活とは全く違う、分け隔てられたものだというメッセージを少し感じるところがあります。

写真⑨は墓ですが、かつて移住する要因の一つに、力の強いタバなんかは亡くなった場合に、その場所を捨てて別のところへ移動するということがありました。伝統的な墓は、先ほど山形先生がおっしゃったように、特にメンテナンスをするということではなく、次第に自然に森に還っていくという墓です。今では教会の裏の墓場にキリスト教式の墓を作って、埋めます。少なくとも有力なタバの死が移住の要因になることはもはやないわけです。

□根底にある「森の中の暮らし」

本当はここで終わるはずだったんですが、最後に一つだけちょっとエピソードを付け加えます。このシンポジウムの半月前まで調査を行っていたんですが、そこでびっくりするような事件を耳にしました。それは、調査していた村の隣の村——人口400人ほどの、小学校もあって、高地人の小学教員も住んでいた大きな村でしたが——、その村が半年くらい前に完全な廃村になってしまったというのです。それを聞いてびっくりして、いろいろ調べてみました。その村に住んでいた人々は、まだ誰も住んでいない森で開拓を進めていました。そっくりそのまま村が移ってしまったということなんです。

廃村になって半年後の村は、まだ半年ですからそんなに著しくは変わっていませんが、それでも綺麗に整地されていた村が、早くも草ぼうぼうの状態になりつつあります。教会は、半年メンテナンスしていないだけで、完全に倒れて壊れてしまっています。乾季で村の中に野火が走って幾つもの家が自然に焼けてしまっています。写真⑩は、かまどだけ残って家がそっくり焼けてしまってい



写真⑩ 廃村の様子

ます。また果実とか畑の作物の残りを食べているのか、ヒヒの樂園みたいな状態になっていました。小学校も完全に廃墟になってしまって、蟻地獄の巣が床一面にみられるばかりでした。

何で廃村になったのかということは、非常に不思議で、新しい村にも行ったりしたのですが、調査村のクミの村の人たちに聞いても何も語らない。地方行政府も困惑して、あいつら何やってるんだという感じで首をひねっていました。それで、新しい村に行って一人一人にいろいろ聞いてみたんですが、いくつか挙げられた理由のなかで、一番にはアニュワのテリトリーに近い所でここ数年小規模ですが殺人事件が起こっていて、村の周辺で

も人々がアニュワの人に捕まって殺されるという事件がいくつかあって、そういう脅威に対する逃避ということが考えられます。もう一つは病気の流行で——現在病気の名前を同定しているところなのですが——、この4年間くらいで40人くらい死んでいます。その村の人たちだけが罹っていて、周辺の村の人たちはほとんど罹っていないので、この場所に何かがある、呪いかもしれないという風に語られているわけです。

いずれにしても、定住化してもやはり森の中の暮らしというスタイルは持続しているということが分かりました。

□おわりに

このようなプロセスを見ていると、集住化や、社会の激変のなかで、集団をまとめていくには、シンボルが必要でもあるし、有効でもあるといえます。そういうなかで、意識的であったかどうかは別にして、選ばれたのがキリスト教であったわけですね。キリスト教と、集住村の中央にあるキリスト教会というのは、その社会のなかで集団のアイデンティティを支えるシンボルとして選ばれた、ということがいえるのではないかと思います。

以上です。ちょっと時間を超えてしまいすみませんでした。

(さとう・れんや／九州大学)